レンズの中の星々—7つの神の世界—

クラインの壺

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一度は世界を巡る旅を終えた写真家、門矢士。彼は謎の予感に導かれ、かつて幾度となく訪れた場所を訪れる。未知の世界から迷い込んだ少女、蛍の抱えた問題に、自分から関わることを決め、明確な意志のもともう一度世界を渡る旅を始める。

本作は小説　仮面ライダーディケイド　レンズの中の箱庭―門矢士の世界―とオンラインゲーム　原神のクロスオーバーになります。

元はと言えば原神の主人公の来歴と能力ってディケイドみたいだよね！という話題

から立った企画でございます。
　そも何故小説版の士かと言えば、ＴＶ版のディケイドだと極端に強すぎる（他キャラクターにメタを張れすぎる）か大所帯になりすぎることから、平成１０ライダーの力が中心かつ最後は一人になった方の士になりました。
　なぜ原神側が空（男性主人公）ではないのかといえば、ただの趣味です。言い訳するなら両性居たほうが話を動かしやすいからです。

目次

起点―門矢士の世界―　――――　1
起点―７つの神の世界―　――――　18
飛翔―始まりの風―　――――　32

起点―門矢士の世界―

誰も立ち入ることのないような廃墟、文字が掠れてほとんど読めない看板の先にある一室にぽつんと置かれた集合写真用の足の付いたカメラの周りには、少しホコリに埋もれた3種類の靴跡があった。

その場所は、何時までも稀人を待ち続けている。

カシャリ、シャッターを切る。ガリガリ、ダイヤルを巻く。指に馴染んだ感覚を確かめながら、道を行く。

いつもと変わらない、あの頃ともあまり代わり映えのしない、日銭を稼ぐための仕事。天気や人の波の影響を受けやすい仕事柄、予感や予兆にも敏感になった。だからだろうか、ふといつかの旅を思い出したことも、偶然ではない気がした。

そうしてこの人通りの少ない道を進んでいる。

街を眺め、空を眺め、人とすれ違う。デジタルのカメラが手に馴染まず、結局こうしてアナログのカメラを構える自分が、部屋の隅の忘れられた置物のように思えるときもあるが、いざこうして撮った後で、現像するまで何が撮れたか、どう撮れたかがわから

ないのも、短いタイムカプセルのような気もして、些か子供じみた楽しみを持っている自分に嗤う。

歩いているうちに寂れた写真館の前に通りかかる。

なつかしいにおいがした。

いよいよもって感じた予感が外れることを願う自分がいる。

歩を進め、人が去って久しいスタジオへ立つ。

日が沈み、明かりの灯らぬこの部屋で、月の明かりだけがこの場所の輪郭を映している。

よかった、誰もいない。

知らぬ間に詰めていた息を吐き出し、踵を返すその瞬間だった。

子供が弾き出された。

あり得るはずのないこと、ではないことは自分自身がよく知っている。

だが、何故？

突然の出来事に混乱を隠せず、埃を吸ってむせる子供をよそに後ずさる。

このまま下がって外へ抜け出してしまえば自分は無関係だ。そう思う自分の脳裏に、かつて自分を見送り、自分が見送った顔が過る。あのとき自分はどうした？

一度思い出してしまうとあとは止まらない。後ろへ伸ばした足を引き戻し、そのまま

前へ踏み切る。
「おい、大丈夫か」
　声は掠れていないだろうか、顔は引きつっていないだろうか。そんなことが頭を駆け回る。
　埃まみれの子供がこちらを向く。そして慌てたように辺りを見渡す。
「えっと…　ここはどこですか?」
　何だ、話せるじゃないか。と自分を落ち着かせる。
「さあな。それより、ひどい姿だぞ」
　元々は白かったであろう衣装を指さして言う。
　意味を理解した子供は慌てて服を叩き、ホコリを払う。
「随分変わった格好をしてるが、お前何者だ?」
　服の意匠に見覚えはなく、ところどころにはめられているのであろう物体は淡い光を放っている。ひと目でこの世界の住人ではないことがわかる。
「えっとその…　私達は旅をしてて、近くにある城に向かおうとしてたときに…　どうしたんだっけ?」
　思い出そうとしているのかうんうんと唸る子供を眺めながら、少なくとも悪意がないことを確かめ、対応を考える。

「あ、あれ？パイモン？パイモンってば」
何もない所をキョロキョロ見回しながら誰かの名前を呼ぶ。パイモンとは、どこかの悪魔の名前だっただろうか。
「そうだ！このカメラ！」
大きな声に驚きながら、子供の指差す方向を見る。そこには一台の、足の付いたカメラが立っている。
「それみたいなカメラを拾って、どう使うのかと思って覗き込んだらここに来たんです！」
その意味を察し、その予兆を感じ取った自分を恨みながら、口を開く。
「なら、この世界の住人じゃないんだな」
「そう・・・ だと思います」
「なら、これからのあては？」
「無い・・・ です」
何度も話を切り上げようとし続ける自分を押し込めて聞き出し、ついには逃げられなくなった自分にため息をついてから、所在なさげに、心細そうに立つ子供へ向き直り、心底嫌で、そのくせ欲して止まない思いを告げる。
「なら、ついてこい」

口に出してから、後悔する。今更求めて何になる。そう頭ではわかっているのに。
そんなキラキラした目で見ないでくれなどと言い出せるわけでもなく、視線から逃れるように背を向ける。
もう一度一歩を踏み出す。また歩が止まる。
子供の格好を思い出し、羽織っていたコートを投げ渡す。
「羽織っておけ、その格好じゃ目立つ」
笑顔を隠さずコートに袖を通す姿を見届けずに、今度こそ、外へ出る。
本当なら、あのまま元の世界に送り返してやればよかったものを。何度も自分の中で湧き上がる後悔をどうやり過ごしたものかと考えていると、きゅるるる、と空腹を訴える音が耳に届く。振り返ると、子供は恥ずかしそうに、食料が尽きてから日が経っていることを告げる。どうやら、引き止めたのは正解だったようだと安心する。
「安心しろ、後でたっぷりご馳走してやる」
もう少しは、自分を嫌わずに済むらしいと安堵していると、今度は何を思いついたのか、子供が速度を合わせて並んで歩き始める。
「そういえば、自己紹介がまだだったよね！私は蛍。あなたは？」
「俺は・・・　門矢士だ。そら、着いたぞ」
相変わらず一人で暮らすには少々広い我が家へ帰り着く。

「詳しい話は飯を食べてからだ。いいな」
そう言い含めてキッチンへ向かう。
適当に食材をあさり視線を上げると、何やら手持ち無沙汰に突っ立っている蛍と目が合う。
「座ったらどうだ?」
「し、失礼します」
有り合わせだが質より量と作り上げ、テーブルに並べる。
「すごい!これ… 食べていいの!?」
「何のために作ったと… まあいい、よく味わって食べろよ」
そう聞くやいなや、凄い勢いで食べ始める。
本当に腹が減っていたんだな… などと思いながら、幸せそうに料理を頬張る姿を眺める。
「がっつくと喉に詰まらせるぞ… そんなに腹が減ってたんだな」
俺の声に、ブンブンと頷いたと思えば、勢いよく飲み込み口を開く。
「でも、それだけじゃなくて、すっごく美味しいの!」
あの有り合わせがか?とも思ったが、こんなに幸せそうに食べているのだから、こいつにとってはそうなのだろう。

見ているこっちまで浮かれそうになり、深みにはまる前に思考を戻す。
出会ったときの第一声、自分が何故そこにいるかよりも自分がどこにいるかの確認をしようとした様子から察するに、こいつはそういった空間の転移を異常とは捉えていないか、もしくはその覚えがあるということなのだろう。そう考えた瞬間、あの豹変した茶色いコートの男のことが浮かぶ。彼女もああなってしまうのだろうか。それとも別の理屈で旅をしているのだろうか。わからないことばかりだ。だが、それもじきにはっきりする。直接問いただせばいい。
と、こちらを見つめる視線とかち合う。
「ど、どうしたの?」
「別に、食べ終わったらお前の目的とか、そういうのを聞かせてもらおうと思っただけだ」
「そっか。もうちょっと待っててね。すぐ食べ終わるから」
そう言ってまた食べ始める。
しかし、こいつの美味しそうに食べる姿は、うまく言い表せないが、あいつに似ていると、思う。
そうしているとやがてあの量を平らげた蛍が満足そうに微笑む。
「ごちそうさまでした!」

「まったく、よく食う奴だよ。じゃあ本題だ、なぜ旅をしている」
　単刀直入な問に少し話し辛そうにしながらゆっくりと口を開く
「えっと、私は元々兄弟で世界を旅していたんだけど、前の世界で白い神様みたいなのに襲われたときに離れ離れになっちゃって…」
「で、行方を探すためにその世界に留まっていたと」
「うん…　どこだかわからない場所に流れ着いちゃったけど、ようやく調子も落ち着いて探しに行けると思った矢先にこうなっちゃって…」
「なるほどな。また災難だったな」
　相槌を打ちながら、家族を失う苦しみに子供が背負うには些か重すぎるのではないかなどという感覚が襲う。
「そうだ、士はどうしてあの場所にいたの？」
「あの場所には俺も縁があってな。何となく近付いたんだが、まさか…　な」
「じゃあ、あの場所にはそういう、場所との繋がりがあるの？」
「思っていたよりも察しが良いな。あの場所は世界から抜け出すための場所だ。あの時はそのまま送り返すこともどうかと思って連れてきたが」
「ううん、ありがとう。あのままだったら私、この服装のままでこの世界から出る方法を探すところだったから…　それに！こんなに美味しいご飯まで！」

「まあ、こうして会ったのもなにかの縁だし、そのまま野垂れ死なれても寝覚めが悪いからな」
　こう有難がれるとやはりくすぐったいが、何もせず恨まれるよりはマシと自分を切り替える。
「なら、また兄弟を探しに元の世界へ行くのか？」
「うん。でもあなたにこんなにお世話になって、お礼をしないわけにもいかないし…」
　子供なのだからもっと自由に振る舞ってもいいだろうにとも思うが、これも旅で培った感性なのだろうと納得した。
「別にいい。ホイホイついてきたことも、変なものをいじってこの世界に来たことも含めて、危なっかしいしな」
　むう、という顔をしながらこちらを睨むが、やはり迫力には欠ける。
「それよりも、だ。俺もその兄弟探しを手伝ってやる。光栄に思え」
「ええっ!?お世話になりっぱなしなんて悪いよ」
「お前のためだけというわけでもない。この世界の景色も嫌いじゃないが、そっちの世界にも興味があるからな。そのついでだ」
　そう言われて何か言い返す内容を考えてるのか部屋を見回す蛍。やがてその視線が一つの写真に止まる。

「もしかして、写真が好きなの？」
「・・・ まあな。それで稼いでる」
「この人達、すごく楽しそう。この人達とは？」
　それはかつてこの家で過ごした三人で撮った写真だった。撮るつもりはなかったが、あいつに請われた上に悪乗りした奴がいた故に撮ることになった写真。
「さあな。元々勝手に居着いた連中だし、また自由気ままに出かけてるんだろ」
「そっか。でも、その人達を待ったりはしないの？」
「別にいい。俺は俺で撮りたいものを撮りに行くだけだ。あいつらだって自分の帰る場所くらい自分で決めるだろうさ」
　一人は最期に俺達を選び、もう一人は笑顔でどこかへ去った。きっとそれでいいのだ。
「それにきっと、私の旅はとっても危険なものになると思う。あの世界は、この世界と違って昼も夜もモンスターがうろついていて大変だし・・・」
「安心しろ、俺にもそういった心得はある。四の五の言うだけ無駄だ、こう見えて大概のことができるしな」
「うう・・・」
「俺の勝ちだな。もう遅いし、今日は寝ろ。寝床なら貸してやるから」

あいつの部屋を貸すのは気が引けた。だが、この家で少女を寝かせられそうな部屋はここしかない。

意を決して部屋のドアを開く。あいつが姿を消して少ししか経っていないせいか、まだ気配がするようにも感じたが、頭を振って感覚を追い払う。あれから俺なりに掃除や片付けなどもできるようになった、これもいい機会だと軽く辺りのホコリを払い有無を言わせず少女を放り込む。

ドアを閉める前、何かを言いたそうにこちらを見ていたが知ったことか。

俺はやはり、あの部屋に長居したくない。せっかく前に進んだつもりなのに、また後戻りしてしまいそうになる。

「じゃあ、おやすみなさい」

ドアの向こうから聞こえる声で我に返る。ああ、とだけ返し、自分の部屋へ戻る。

床に就き、意識を沈める。ほんの数時間のことだというのに、随分と気疲れしてしまった。我ながら先が思いやられると自嘲する。

気が付けば日が昇っていた。撮影などの予定も特に無く、気兼ねなく旅に出られる。もっとも、この旅はさしてこの世界の時間とは関係ないのだが。

朝食を拵え、起きてこない少女を起こすべく部屋の戸の前に立つ。

まだこの部屋にいるのだろうか。

まだこの世界にいるのだろうか。
胸の奥に重く暗いイメージが渦を巻き、ノックしようと構えた手が止まる。
いないなら手間が減っていいじゃないか。その時は腹が膨れるほどの飯を平らげてまた写真を取りに外をふらつけばいいさ。何度も自分に言い聞かせて、戸を叩く。
返事がない。
いよいよ持って嫌な予感は現実となるのかと不安になりながら、ノブをひねり、ドアを開く。
布団からはみ出したここらでは見かけない明るい金髪を見て、やっと安心して息をつく。
「おい、朝だぞ」
安らかな寝息は聞こえるが、どうにも起きた気配はなく反応もない。
頬を軽く叩く、少し顔をしかめるが起きない。
「よし」
勢いよく布団をはぎ取る。
「ひゃあああ!なに!?なにごと!?」
突然の環境変化にさらされて、素っ頓狂な声を上げて蛍が起きる。
「朝だ。食べたら出るぞ」

素っ頓狂な声が耳に残り、笑いを堪えながら声をかける。
「も、もう。笑わないでよ」
顔を赤くしながらこちらを睨むも、やはり迫力には欠ける。
「ほら、メシが冷めるぞ」
新しい旅へ向けて、これまでの旅より長い旅へ向けて、気疲れなど起こせない。強い自分を演じることに早く慣れてしまおう。
胸の奥に強く刻みながら、笑いながら階下へ降りる。
しばらくすると蛍も格好を整え降りてくる。他愛のない話をしながら朝食を終え、もう一度世界を渡るための支度を整える。
覚悟を決めて再訪した寫眞館は、あの頃と変わらず人気のないまま、すぐにでも崩れそうな外観を保っていた。
「ここ、こんな場所だったんだ」
物珍しげに建物を眺める蛍をよそに建物へ入る。
「ああ！ちょっと待ってよ！」
狭い建物、見失うことはあるまい。ずんずんと奥へ踏み込み、スタジオへ入る。
ここまで来て、一抹の不安が首をもたげる。これまでこの場所を用いた旅は俺に引きずられる形で他の二人が転移していたが、この場合俺が関わることで余計な世界に飛ば

されやしないだろうか。覗き込む順番が変われば適用されるのだろうか。蛍を望む世界へ運べるのだろうか。

「どうしたの？」

気が付けば覗き込んだ蛍と目が合う。

「別に、心配されるようなことじゃない」

目を逸らし部屋の中央に立つカメラを見る。こうなればなるように任せるしかあるまい。

俺が弱気になってどうする。せめて少女の目のない場所で立ち止まれと己を鼓舞する。

「このカメラをどうすればいいの？」

お前が来たときと同じだ。と言おうとして、位置関係で思いとどまり移動する。

「このカメラのファインダー・・・　まあここを覗き込め」

一瞬頭にハテナを浮かべてそうな顔になったのを察し言い方を変える。

言葉に従い、蛍がカメラの後ろへ立つ。ファインダーに被せられた布をめくり、覗き込む。その背中越しに続いて覗き込む。

向こう側には、これまで旅してきた世界とは違いすぎる、あまりにも広い大空と同じだけ広大な草原が広がっていた。

景色を理解した頃には世界はあり方を変え、大自然の中に自分が立っている。
「戻ってこれた――！」
隣の少女の声を聞きながら、首から下げたカメラのシャッターを切る。焼き付けられたフィルムがレンズの下から排出される。
落とさないように引き抜き、そっとポケットへ仕舞う。
「ああー！お前！心配したんだぞ！」
知らない声が隣で騒ぎ出し、声の主を見てぎょっとする。
「あはは、ごめん。心配かけちゃって…」
「全く、これまで一体どこに行ってたんだよ！」
「うーんと…　別の世界？」
「よく戻ってこれたな!?」
「そこは何とか。この人のお陰で…　士？」
こちらの様子を伺い、あーそっかと何か理解したのか声の主を示しながら話を続ける。
「この子がパイモン。ちょっと前に釣り上げちゃった旅の仲間だよ！」
状況をなんとか整理しつつ、混乱する頭を落ち着かせながら口を開く。

「この世界では浮遊する人間は普通なのか」
何に困惑してるのかをようやく理解した蛍が答える。
「さあ?」
「「おい!」」
知らない声の主たる存在は、たしかに人間の、幼児の姿のようだが、まずその頭に輝く冠はどこかに固定されるでもなく浮いている。それだけならばまだいい。多少変ではあるが物を浮かせる力という類のモノはこれまでの旅でもそう一般的ではないにしろあった。だが特筆すべきは、その体自体が地面から1m以上浮いているのだ。まるで宇宙遊泳をするようにその場所にふわふわと飛んでいる。
「えぇっとパイモン?この人は門矢士、向こうで私を助けてくれた人だよ」
「そんなやつがなんでここにいるんだよ!?」
「悪いかチビスケ、俺が何処に居ようと勝手だろ」
あまりにもとんでもない状況に混乱していた頭が落ち着き、目の前の自分をにらみつける小さい生き物に目を向ける。
「こいつがあまりにも危なっかしいんでお守りを買って出てやっただけだが?」
「なにをーぅ」
その額を人差し指で押し返し、羽織ったジャケットを翻しながら大仰に礼をする。

「うわっ。何するんだよ！」
「まあ、言ったからには手伝うが、基本的には俺も好きに動かせてもらうさ」
「ぐぬぬぬぬ。おい！こんなやつ本当に連れて行くのか!?」
「うん。旅は道連れって言うし、きっとこうしてついてきてくれたのも何かの縁だもの」
「だそうだぞ。で、これからどうするんだ？アテはあるんだろう？」
　いつまでもここにいても仕方がないと思い、話題を変える。
「うーん、とりあえず昨日パイモンが言ってた通り、近くのお城を目指してみようと思う」
「昨日？言ったのはついさっきだぞ」
「あれ？でも確かに昨日一晩寝て・・・」
「まあ世界毎に流れる時間なんて違うもんだろう。そうと決まれば行くぞ」
　明らかにこれまでの世界と違う世界。見たことのない景色。少なからず、冷静になったはずの俺はこの新しい旅に心を躍らせていた。

起点―７つの神の世界―

「随分とくたびれた彫像だな」
「そうだね…」
いたる所が欠けてボロボロな石像を見上げる。
パイモンの言うとおりの方角へ進みはや数分。人に会うより先に文明の残骸に遭遇した。
「もうとっくに世界滅んでるんじゃないか？」
「そんなわけ無いだろ！」
視界の端を飛ぶ小さいナニカの声を聞きながらシャッターを切る。
「そうは言うが、こんな有様で人が生きてるとは思えないな」
「そ、それは、その…」
とパイモンが口ごもっていると、急に眩しい光に照らされる。
「今度は何だ！」
そう言いながら振り返ると、蛍の服のあちこちが淡い緑色の光を宿し、当の本人は神像とやらに手を触れたまま呆けている。

「お前、神像と共鳴したのか！」
　また知らないワードが出てきたな。
「これをすると何ができるの？」
「これは風神像だから、多分風元素の力が使えると思うんだけど…　あっ丁度いいところに炎スライムがいるぞ！元素の力を試してみようぜ！」
　勢いよく話が進んだ先には、見覚えのないどうにもファンシーな生き物が３匹ほどうろついていた。炎スライムと呼ばれたそれは、薄い皮膜か何らかの力で名前の通りの炎を包み込んでいるらしく、足元の植物が大方焼け焦げている。
　しかしそんな通り魔的に力を行使してもいいのだろうか。と考えているうちに、今度はどういう原理か蛍が前方に風を放射してスライムを押し出し、あたりの水溜りに炎スライムを落とす。すると炎スライムは中の炎を守る力を失ったのか、風船が割れるような形で消滅した。
　そしてその周囲の植物は軒並み燃えていた。なるほど風元素の力はそういった、ものに対して放射する形で影響するのか。
　そうして蛍が力の感触を確かめている向こうで、パイモンが更に向こうの方を指さし声を上げる。
「見えたぞ！あそこにあるのがモンド城だ！」

またボロ屋敷なんじゃないかと追いついて見渡すと、確かに大きな城塞が見えた。大きな風車が目立つその城塞は、少なくとも無事に機能しているように見える。
「あそこに… いるのかな」
「さあな。行かなきゃわからないだろ」
「そうだね… まずは、行ってみなきゃ」
見た目相応というべきか、パイモンは壮大な景色に目を奪われている。
見下ろした景色にはいくつも動くものが見えた。この世界の生き物だろうが、恐らくこの世界の住民であろう人物が一人しかおらず害の有無がわからない以上、注意するに越したことはないだろう。
幸いなことに、あの場所から城塞までは舗装はされていないものの分かりやすい道ができていた。
道に沿って下りていくと、上から見えていた動くものの正体が見えてきた。それは仮面をつけた非常に色の黒い… 人間のようだが体格は人間、特に成人に比べてあまりに華奢で小さく、その顔を覆う仮面は輪郭を覆い隠してあまりあるものだった。
「あれは一体何だ?」
「あれはヒルチャールだ。独自の文化を持ってるっぽいんだけど… 意思の疎通はできないし、すぐ襲ってくるから厄介なんだ」

「人を襲うの？」
　蛍が冷たい空気をまといながら徘徊するヒルチャールを睨む。
「そうだぞ・・・　って、ど、どうしたんだよ。ちょっと怖いぞ」
　気付いたパイモンが少し後ろに下がる。今にも踏み込んでいきそうな蛍の襟首を掴み引き戻す。
「何するの！」
「見かけるたびに暴れて回ったんじゃすぐそこに行き着く前に日が暮れる。”お掃除”するにしても寝床を確保してからだ」
　未だ警戒の解けない蛍がなにか言い返そうとするも、進行方向上に点在するヒルチャールの集落らしきものを見て口籠る。蛍一人で戦うとすればかなり骨の折れる数だろう。
「だったら、急ごう」
「それでいい。わざわざ邪魔されに行く必要もないだろう」
　いざとなればやむを得ないが、こう不必要なことで俺も戦うつもりはない。戦うにしても状況がわかってからだ。
　前を行くその背中には不満がありありと見て取れるが、今ばかりは仕方がない。
　先頭が早足で進んだお陰かはたまた余計な邪魔が入らなかったお陰か、太陽が真上に

来る前には上から見えていた途中の森へ入れた。
　この世界に季節の概念があるのか知らないが、心地よい風が吹く割に陽光は容赦なく照りつけて暑い。元いた世界が秋だったが故に格好が余計な熱を持ってしまっているのだろうか。
「!…　止まって」
　突然蛍が小声で木の陰に隠れる。
　何事かと思い行き先を覗うと、そこには人一人丸呑みできそうな頭とそれに見合う体を持った巨大生物がいた。
　更に人の声が聞こえて視線をずらすと、爽やかな緑の衣装を纏った少年が巨大生物へ何事か語り掛けていた。
「おいチビスケ、この世界にはあんなのがウロチョロしてるのか?」
「おいらあんなの知らないぞ…」
　どうにも少年と巨大生物はそう浅い関係ではなさそうだ。森の中でこうしているということは穏やかな生き物なのだろうか。
「へくちっ」
「誰!?」
　小さなくしゃみの声に反応し少年が慌ただしく辺りを見渡す。自然に巨大生物を庇

うように立ったが、当の巨大生物はそう穏やかではなかった。
その巨大な首をもたげ、途轍もない衝撃波と共に咆哮を上げる。
あまりの強風に目を閉じる。
少し後ろへ押しやられたところで強風が止み、目を開くが巨大生物も少年も既にどこかへ去ってしまっていた。
「…」
「…」
「おいチビスケ」
「しょ、しょうがないだろう！ちょうど髪が鼻に入ってくすぐったかったんだぁ！」
「まあ、起きちゃったことはしょうがないよ。先へ進もう」
そう言って蛍が歩き出すが、ちょうど巨大生物がいたあたりで何かを見つけたのか足を止める。
「どうした？」
「これ、何だろう」
その手の上には、赤黒く濁った涙滴型の宝石が浮かんでいた。
「あのでっかいのが落としていったのかな」
「何かこう、力が込められてるみたいなんだけど…　どうなんだろう」

「なら持っておこうぜ。何かの役に立つかもしれないからな！」
少し不穏なもののように思えるが、よくわからないものに関してはやはりこの世界の住人の意見を採用する他ない。
蛍が包み込むようにその宝石を握り込むと、まるで手品のようにその宝石は消滅した。
先程倒したスライムから落ちた何かもそうだが、彼女はどこかに荷物をストックできるらしい。着の身着のままでどう旅をしていたのかと疑問だったが、どうにも俺の知る物理法則は彼女には通じないらしい。
森を抜けると一気に視界が広がり、大きな城塞の側面が大きく見えてくる。
それと同時に湖へ突き当たり、あの城塞が湖の真ん中に建っているのが分かった。
「城と城下町てなものかと思ったが、街ごと城壁で囲っているのか…」
壮大な光景に目を奪われ、無意識にシャッターを切る。
すると遠くから走る足音とともに声が聞こえてくる。
「そこの人達！止まりなさーい！」
呼び止められそれぞれが振り返ると、木々の隙間から赤いウサギが現れた。いや、大きな立ち耳のリボンが目を引くウサギのような少女が飛び出してきた。
俺達のすぐそばまで走ってきた少女はしばらく膝に手をつき肩で息をしていたが、あ

る程度落ち着いたのか、胸の前に手を構えこちらを見る。
「風神のご加護が有らんことを」
　なるほど、この地域の挨拶みたいなものか。
「私は西風騎士団の偵察騎士、アンバーよ」
　ファンタジーな世界だとは思っていたが、兵士ではなく騎士が来たか。しかも一人で。
「あんた達、モンドの人じゃないよね？身分の証明はできる？」
　訝しむような目で俺達を見定めようとするアンバーと名乗った少女の背には、普段使いのものなのだろう弓と矢が架かっている。
　確かに少々マズい状態なのだがどうにもこの少女、危なっかしい。偵察騎士というのが俺の想像する通りなら、俺達の前に姿を表したことも、目の前で無防備に息を乱し、また整える姿を晒したこと、万が一俺達に害意があった場合仕掛けるチャンスはいくらでもある。この威圧感の無さも、きっと人を疑うのに向いていないのだろう人柄を感じさせる。
　だが、俺以外のやつはそうは思わなかったらしい。
「落ち着いて、怪しい者じゃないんだ…」
「怪しい人は皆そう言うわ」

「あうぅ、えっとぉ」
一番口下手な現地人が応えてしまった。
「こんにちは。私は蛍」
「蛍？・・・ ここら辺の地域では珍しい名前ね。それから・・・ そちらは？」
「こっちが友達のパイモンで、こっちはうーん・・・ お目付け役の士」
「お前を危なっかしいと評してついてきたのは事実だがお目付け役ってお前」
文句を言うがどこ吹く風、さっきの仕返しのつもりだろうか。
「私達は遠いところから旅をしてきたの」
「なるほど、旅人だったのね」
統一感のない一行の見た目に合点がいったのか何度か小さく頷く。
「近頃、モンド城の周辺で大きな龍が出没しているの。だから、早く城に入ったほうがいいわ」
大きな龍、まさかさっきの巨大生物だろうか。休める場所を手に入れる前にああいったのとぶつかり合うのは御免被りたいものだが。
少女は言い切ってから一瞬考えるような素振りを見せ改めて口を開く。
「そうだ、ここから城門までそう遠くもないし、ここは騎士の務めとして城まで送ってあげる！」

「え？任務があって城から出たんじゃないのか？」
「もちろん任務もあるわ。でも安心して、任務を行いながらでも、あんたたちの身を守ることくらいはできるから。それに・・・」
　そう言って俺たちの前を通り過ぎ、少し振り返り人差し指を立てる。
「怪しい者を放っておくわけにもいかないからね！」
　そう宣言され、蛍が苦笑いをする。
「まるでこっちを信用してないね・・・」
「当然だろ？向こうにしてみれば忙しいときに現れた余所者でしかないんだ。出会い頭に撃たれなかっただけマシだな」
　こちらの物言いが聞こえたのか、アンバーは先程までのキメ顔から一転して申し訳無さそうな顔になる。
「ごめん・・・　優秀な騎士にあるまじき言動だったね。謝るよ、えっと・・・　見知らぬ、その・・・　尊敬できる旅人さん」
「ぎこちない!?」
　言い慣れぬ言葉とそれに対するツッコミで思わず吹き出す。
「何よ！『騎士団ガイド』で決められた言葉に不満でもあるの!?」
「まさか！中々にキマってるじゃないか。それより任務があるんだろう？」

「うぅ・・・ あなたガイア先輩みたい。まあいいわ、早く済ませて城へ行きましょう」
　やはりこの少女、危なっかしいな。
「ねえ、得体の知れない旅人さん方。何しにモンドへ？」
　遠くにいる風スライムを撃ち落とす腕前を披露しながら、アンバーが口を開く。
「蛍が遠い遠い旅の途中で、兄妹と離れ離れになってな。オイラたちは一緒にその兄を探してるんだ」
「へぇ、家族を探してるのね・・・」
　急にさっきまでの勢いが嘘のような遠い目になる。が、瞬きとともにまたいつもの雰囲気が帰る。
「そうだ！今請け負ってる任務が片付いたら、城内にお知らせを出しましょう！」
「本当?!」
「ええ！」
　この二人は年頃が近いからか、すでに友人同士のような雰囲気になっている。世界を渡るときに大切な理解者という存在を、もう確保できている。
「そういえば、任務ってなんなんだ？」
　パイモンの問いに、番えていた矢を離し答える。
「簡単よ。見ればわかるわ」

そう言って少し離れた場所を指差す。
「あっ、ヒルチャール!?」
独特の絵柄の書かれた木材で何かを組み立てているヒルチャール数匹程度のの群れがそこにいた。
「最近、荒野の化け物が城に近付いてきているの。今回の任務は、その巣の掃除よ」
言うが早いか、一瞬身を低く構えたかと思うと勢いよくアンバーが駆け出す。
走りながら上方へ矢を構えて放つ。走る速度より早く最高到達点へ届いた矢は、矢尻の重さに引かれて落ちていく。その先には、見えたヒルチャールの群れの一番離れた個体。
「ほう・・・」
「私も手伝ってくる!」
「あ、おい!」
止める言葉が出るより先に蛍も走り出す。その手にはどこから現れたのか、細身の剣が握られている。
「クウガじゃあるまいし・・・」
これで手を貸さなければ後から変に恨まれかねない事を思い出し、その背を追う。
気付けばパイモンはどこかへ消えていた。

追いつく頃には群れはほぼほぼ掃討されていた。骨と皮しかないようなヒルチャールの体は、枯れ枝を折るように剣戟に割られ、またその仮面ごと矢に射抜かれていく。そうして力尽きたヒルチャールたちは、内側から何かを発散するように淡い光を放ちながら消失していく。

粗方片が付いたか、さほど息を乱したようでもなく弓兵と剣士が立っている。

「ふぅ。楽勝楽勝！」

見渡した限りのヒルチャールを片付けたことを確認したアンバーは弓を背中に担ぎ直しながら息をつく。それを見て蛍も剣を仕舞う。背後にああやって武器が浮いているのもなかなかに不思議なものだな。

「でも、あんた達も戦えるなんて思わなかったよ」

何もしていない俺は軽く両手を上げ何もしていないことを示し、蛍は照れくさそうに首根っこを掻いている。

「支援ありがとう。ねぇ、戦ってどう思った？」

「全然楽勝だよ」

テンションの高い二人が拳を軽くぶつける。

「なんでこんなところにヒルチャールが現れるんだ？こういう奴らは普通、都市から離れたところに巣を作るよな？」

急にどこかから現れたパイモンが疑問をぶつける。それを聞いたアンバーは腰に手を当て考える素振りを見せる。
「そうね…　本当だったら荒野にいるはずね。でも最近、風魔龍が頻繁に出没するようになって、キャラバンのルートが影響があったの」
話しているうちに顔が深刻になっていくアンバーをそれぞれが注視する。
「暴風が発生する度に怪我人が多数出るし…　騎士団はその被害から守らなくちゃいけなくてね」
「で、こいつらへの牽制どころじゃなくなったと」
「そう。でも、今日また巣を片付けられたから進展はあったわ」
そう言ってアンバーが大きく手を叩く。集中しすぎたパイモンがひっくり返ったがそのまま話を続ける。
「さあ、わたしについてきて！真面目で優秀な騎士が、あんたたちを城まで送ってあげる！」

飛翔―始まりの風―

眼前にそびえ立つ城門の壮大さに目を奪われる。
移動中に見たときですら随分な大きさを感じたものだが、こうして直ぐ側に立つとその感覚も桁違いだ。
過去にキャッスルドランの中には行ったことがあるが、名前の通り見た目とスケールだった。それに比べこれは街を丸ごと内包していることもありこれまでに見たどの城塞よりも大きく感じる。
門の横に立つ衛兵と何か話し込んでいたアンバーがこちらへ戻ってきて佇まいを直す。
「あらためて紹介させてもらうわ。風と蒲公英（ダンデライオン）の城、自由の都」
アンバーが勢いよく城門へ腕を広げる。それに合わせてか城門が開き始め、町並みが顔をのぞかせる。
「西風騎士に守られてやってきた旅人さんたち、モンドへようこそ！」
そのままアンバーが先陣を切り街へ入っていく、それに続き俺たちも城内へ足を踏み入れる。

所々に瓦礫が散乱し万全の状況という雰囲気ではないが、ようやく腰を落ち着けられる場所へたどり着いた。
見るものすべてが新しい場所だったせいか、まだこの世界に来て半日経っていないというのに、随分な時間を過ごした気がしている。
「これでやっと野宿しないで済むな」
大きく伸びをしながらパイモンが呟く。
「でも、みんなあまり元気がなさそうだね…」
辺りを見渡しながら蛍が続く。
「最近、みんな風魔龍の件で頭を悩ませてるからね」
アンバーは答えながら振り返り、後ろ向きに歩きながら喋るという器用な芸当をしながら胸を張る。
「でも、ジンさんがいれば、きっとうまく行く！」
「ジンさん？」
噴水のある広場で立ち止まる。
「西風騎士団の代理団長。モンドの守護者だよ」
両手を広げアピールするように続ける。
「ジンさんが一緒なら、風魔龍レベルの災害でも、きっと打ち勝てるはず」

「すごい人みたいだね」
「うん！」
随分楽しそうに話す姿を写真に納めながら、街の景色の写真を撮る。
やがて少し強い風が吹き、アンバーがその長い髪を押さえながら何かを思い出したような顔をする。
「そうだ。一緒に騎士団本部へ行く前に、蛍に渡したいものがあるの。さっきヒルチャールの巣を片付けてくれたお礼だよ」
「おいおい！オイラにはないのかよ？」
「俺とお前は何もしてないだろ」
「うーん・・・　いま持ち合わせてるのが一つしかないし、士はともかく、パイモンちゃんには使えないというか、使っても意味がないっていうか・・・　あ、でも、二人にも今夜はモンド名物の人参とお肉のハニーソテーをごちそうしてあげる」
「人参とお肉のハニーソテー！」
そんなに喜ぶようなものなのか。
「とにかく、わたしについてきて。今から・・・　高い所に行きましょう。ほら、行くよー！」
突然駆け出したアンバーを追ってたどり着いたのは、大きな女神像が目立つ高所の広場だった。

シスターのような格好の女性が数人の男女に何かを語りかけている。
ただ、街を見下ろす広場の立地のせいもあり、被害もひと目に見て取れた。
「普段、この辺は賑わってるんだけど…　最近は風魔龍のせいで、商人や旅人がめっきり減ってね」
公園の縁から見下ろす俺の横からアンバーも街を見下ろす。
「でも、曲がり角にある酒場はあまり影響を受けてないみたい…　むしろ、いつもより繁盛してる？」
「酒の供給には被害が出てないのか」
「うん、あそこは近くのワイナリーから直接やり取りしてるから」
「なるほどな」
随分と酒飲みの多い街らしい。
「なあなあ、ここで何するんだ？」
「おっと、それはね…」
待ち切れないパイモンがアンバーを急かし、アンバーは腰に下げた宝玉に手をかざす。
すると、二本の輪の付いた折りたたまれた羽が現れる。
この世界ではこれが普通なのか…。

「じゃーん！風の翼よ！」
なにか操作をしたのか、畳まれていた翼が勢いよく展開され、その全貌を晒す。
「偵察騎士はこれで空を駆け抜けるの。モンドに住む人たちも、みんなこれを愛用してるんだ。ここに連れてきたのは、蛍にこれの良さを体験してもらいたかったから！」
「ずいぶんと熱く語るんだな？」
「『風』はモンドの魂だからね」
そう言って蛍の背後へ回り、テキパキと準備を進める。
「さあ、さっそく風の翼の性能を試しましょう。操作は簡単だけど、指示はちゃんと聞いてね」
「う、うん」
なるほど、滑空用の装備なら体格の近い蛍に渡るわけだ。
蛍は挙動を確認するように翼を開閉している。原理としてはグライダーと同じようなものなのだろう。
「じゃあ行ってみようか」
そう言って公園の縁に立った瞬間だった。急に目も開けられないほどの強い風が吹く。
腕で顔を庇いながら状況を確認する。アンバーは尻餅をついただけで済んだが、蛍

は…

「う、上だぁ！」

見上げると、風の翼が風に乗り上空へ吹き上げられてしまった蛍と、その向こうに蛍の陰からはみ出す巨躯が映る。

「風魔龍だ！」

アンバーの声を聞きながら、向こう側の影に目を凝らす。

「あれ、森にいたやつじゃないのか？」

「みたいだな。アンバー！こいつは任せた！」

なんとか腕をつかんだパイモンをアンバーに押し付けて縁を踏み越える。

まだ手の内を明かすつもりはなかったが、まさか本当によくわからないうちに戦うことになるとは。

イメージを確かめ、声に出す。

「変身」

声に応えるようにベルトが現れ、体の周りに光が集まる。時間が惜しい。直接本来の姿以外の姿を選び取る。

直後に背中に展開された6枚の羽根が、風を受けて空高く舞い上がる。

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＪＡＣＫ』

そのまま蛍の方へ流れる。蛍は風魔龍の生み出す気流に飲まれて身動きが取れていないようだった。

風に煽られ姿勢を崩しそうなその背中に手を当て、姿勢を安定させる。

蛍が気付き、こちらを見る。

ものすごい強風で何を言っているのかはわからないが、風魔龍の背中を指差し何かを伝えようとしている。急に圧縮した風の刃を風魔龍に向かって放つが、水の中で水鉄砲を撃っても消えるように、途中で霧散してしまう。

改めて風魔龍の背中を見る。その青い背には、森で拾った赤い石と同じような鈍く赤黒い光を放つ結晶が幾つも着いていた。

あれを壊そうとしたのか？

左腰のライドブッカーを外し、グリップを軽く起こす。銃としての機能を展開したそれを持ち、結晶に向かって引き金を引く。

風の刃ほどではないが、目標に届くより先に風に飲まれて力を失ってしまう。

蛍の方を見ると首をブンブンと縦に振っている。

「届かせるにはあのカードを使うしかないか・・・」

あまりのデメリットにそう簡単には使えないカードだが、そのカードでなくては打破できないことを悟り、ライドブッカーの中から2枚のカードを取り出す。

カードを構えたところで、急に辺りが静かになる。
「この声・・・」
蛍には何か聞こえているらしく、しきりに何かにうなずいていた。
こちらはといえば、このカードの力を使ったとしてもチャンスは一回であるため、タイミングを測っている。
ごう、という音と共に突然風魔龍が加速する。
「迷ってる余裕もないか」
蛍から離れ、カードを2枚立て続けにベルトへ滑り込ませる。
『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＧＯＵＲＡＭ』『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＰＥＧＡＳＵＳ』
空中に描くように現れる巨大な甲虫―ゴウラム―にすくい上げられ、風魔龍へ向けて加速する。
なんとか追いついてきた蛍の音が強化された聴覚に響く。再び放たれた風の刃に頭が割れんばかりの激痛が走る。だが、その研ぎ澄まされた感覚こそが今必要だった。
右手に持ったライドブッカーはいつしか緑色の宝玉が輝くボウガンへと変貌していた。
矢を番えるようにコッキングレバーを引き、目に感覚を集中し、暴風の網の隙間を狙う。

風魔龍が向きを変える一瞬、動きの遅れた瞬間にトリガーを弾く。
音もなく飛び出した矢は、寸分の狂いもなく結晶の一つを砕く。
蛍の放つ風の刃が結晶を砕く音で限界を迎え、緑色の弓使いの姿からマゼンタカラーの姿へ戻る。
激痛により荒くなった息を整えるより早く一段と風魔龍は加速し、今度こそ追い付ける状況ではなくなってしまった。
先程まで風魔龍のあおりを受けて飛行していた蛍も、吹き上げる風がなくなったために段々と高度を下げていく… 下がっていく。
何かを言いながらこっちへ身振り手振りしているが全くわからないので高度を合わせると、かなり必死な顔でこちらへ訴えを始める。
「これ、すっごく痛い!」
「あんなスピードに乗せられりゃあそうだろうな」
「あと、土のそれ何!?土って何者なの!?」
突然の事でこんがらがったまま興奮している蛍を相手するのが面倒になり、ゴウラムに蛍を掴ませる。
「え、ちょっと!」
そのまま急降下し、地面から少し離れた高さで蛍を放し自分も飛び降り変身を解く。

「危ないじゃない！」
　蛍が着地するなり開口一番こちらへ詰め寄る。
「うるさいな。何ともないなら問題ないだろ」
　割れるように痛む頭を押さえながら辺りを見渡す。
　女神像のある公園が壁の上に見え、近くの階段を駆け下りてくるアンバーとその腕に抱えられたパイモンに気が付く。
　アンバーとパイモンに向かって蛍が駆け寄っていくのを目で追っていくうちに三人を挟んで丁度向こうから来る青い意匠の長身の男と目が合った。
　俺の視線に気が付いたのかアンバーが振り返り男へ駆け寄る。
「ガイア先輩。ちょうどよかった、一緒に」
「待て、アンバー。見たことないヤツがいるんだが？」
　ガイアと呼ばれた男は俺と蛍、そしてアンバーの後ろに浮いているパイモンをその隻眼で訝しげに眺める。
「あっ…　そうだった。こちらはガイア先輩。わたしたちの騎兵隊長なの」
　城の外で言ってたガイアってこいつか…　と改めて出で立ちを眺めるが、色こそ衣装に馴染み目立たないものの手の込んでいるであろう装飾と薄笑いを浮かべ真意を計りかねる面構え…　俺はこんなのと一緒にされたのか。

隊長が単独行動か?と疑問に思わない訳では無いが、別の世界へ来ている以上何か定義の違いがあるのだろうと納得する。

続けてアンバーはガイアへ向き直り俺たちを手で示す。

「この人たちは、えっと… 遠いところから来た旅人さん」

その言葉を聞いてガイアの眉が上がる。兵を束ねる立場上そういった警戒は怠らないのだろう。

「事の経緯としてはその、モンド城の周りをフラフラ歩いてたから声をかけて、家族を探してるっていうから協力できないかと思って一緒に来てもらって…」

ほとんど流れで付いてきたようなものだから、報告するにしても中身が無さすぎる。だが、この少女の人の良さからかはたまた彼女がこういったことをすることは日常的なのか、ガイアはくつくつと喉を鳴らしながら彼女の説明を受け入れたようだった。

「なるほど、モンドへようこそ。しかし、こんな最悪なタイミングで来るとはツイてないな…」

やれやれといった様子で肩をすくめたかと思うと、今度は妙に神妙な声を出す。

「俺にも分かるぜ、血縁者と離れ離れになるツラい気持ちがな」

自嘲気味に吐き出される言葉の真意は測りかねるが、このことについては思う事があるというのは理解できる。

「それから、何で風神を探してるかは知らないが」
　そこでスッと蛍の顔を覗き込む。
「誰にでも言いたくない秘密はある。お前さん方もその口だろう？」
　その迫力に押されてか蛍が後ずさったのを見て満足したのか、軽く笑いながら身を引く。
「ははっ、だから聞かないでおいてやるぜ。とにかく、騎士団を代表して礼を言うよ」
「被害が出るのを見過ごせなかった…」
　大仰な動きで一礼をした後、蛍の言葉を聞いてまた面白そうに口の端を上げる。このニヤついた雰囲気でどうにもどう受け取ったが読めない。妙な薄気味悪さを感じる。
「謙虚なことだ。で、さっきの風魔龍との戦いで、城内にいた人間は全員お前たちの活躍を目撃した。無論俺達の上司、代理団長もな」
「代理？団長様本人はこの状況でのんきにお出かけか」
「まあそこは追々な。そこでだ、俺達は風魔龍を退けたお前たちと話がしたい。騎士団本部まで同行願えるか？」
　さっきので気圧されたのか不安げに蛍とパイモンがこちらを見る。
　実際。この男は明らかに手の内を隠している感覚がある。だが、その横のアンバーは行動を共にした時間は短いが対照的に表裏のない快活な少女だとわかる。こんなやつ

でもやっていける騎士団なら不用意なことはそう起こらないだろう。
「・・・ はぁ。ここで断ったって何にもならないだろ。首を突っ込むにしろそうでないにしろ、状況を把握しておくに越したことはない。それに、もとよりそのつもりだったろう?」
「そう、だよね」
「そうと決まれば俺は先に本部に戻って代理団長にあらましを説明してくる。アンバー、客人の案内は任せたぜ」
「は、はい!」
　言うが早いかガイアは颯爽と踵を返しどこかへ去っていく。
「行っちゃった…」
「なんか凄いやつだったな。色々と」
「あはは、あれでもちゃんとやる時はやってくれてる・・・ はずだから。私達も騎士団本部に行こっか」
　そう言ってまた先導するようにアンバーが前へ出る。
「ならちょうどいい、移動しながら騎士団についても教えてもらおうか」
「うん! じゃあ何から話そうか・・・」
「そうだな、お前が代理団長を気に入ってるのは聞いていたが、団長様はどうしてるん

だ」
「う～ん、風魔龍の騒ぎが起こるより少し前に遠征に出ちゃってね…」
「団長が自ら行ったのかよ?」
「うん、今のモンド城にいるメンバーでも大丈夫だって言ってテイワット大陸をぐるっと」
　随分と信用されてるんだか楽天家なだけか、いざここまで窮地であることを思うと少々悩ましい。
「じゃあまだまだ帰ってくるって訳じゃないんだ」
「そうだね。当分は私達でモンドを守ることになってる。だから頑張らなきゃ」
　確かに、そうなると城の周りの警戒は怠れないな。
「…　責任重大だね」
「でも、だからこそしっかりやり遂げたら見直されると思わない?」
「上昇志向、だね!」
「うん!」